

# 『源氏物語』 夕霧と柏木 —— 同じ根から出た植物のあらわれとして

伊藤 禎子

## 一、夕霧と雲居雁の恋

光源氏は、十二歳で元服を迎えると、左大臣の一人娘・葵の上と結婚する。葵の上は、息子・夕霧を出産するが、産後の肥立ちが悪く、亡くなってしまふ。生まれた息子・夕霧は、その後、葵の上の屋敷で、祖母・大宮のもとで養育される。

一方、大宮には息子・頭中将／内大臣がいる。正妻・四の君とは別の、王統腹の妻のもとに、一人娘・雲居雁が誕生する。その後、頭中将／内大臣は、母を失った雲居雁を引き取るが、その養育を母・大宮に委ねる。かくして、大宮という〈母〉のもとで、夕霧と雲居雁という〈子〉が、ともに成長していくことになる。

冠者の君、ひとつにて生ひ出でたまひしかど、おのおの十にあまりたまひて後は、御方異にて、「睦ましき人なれど、男にはうちとくまじきものなり」と父大臣聞こえたまひて、け遠くなりたるを、幼心地に思ふことなきにしもあらねば、はかなき花紅葉につけても、雛遊びの追従をも、ねむごろにまつはれ歩いて、心ざしを見えきこえたまへば、いみじう思ひかはして、けざやかに今は今も恥ぢきこえたまはず。御後見どもも、「何かは、若き御心どちなれば、年ごろ見ならひたまへる御あはひを、にはかにも、いかがはもて離れはしたなめきこえん」と見るに、女君こそ何心なく幼くおはすれど、男は、さこそものげなきほどと見えこゆれ、おほけなくいかなる御仲らひにありけん、よそよそになりては、これをぞ静心なく思ふべき。まだ片生ひなる手の、生ひ先うつくしきにて、書きかはしたまへる文どもの、心をさなくて、おのづから落ち散る折あるを、御方の人々は、ほのぼの知れるもありけれど、何かは、かくこそと誰にも聞こえん、見隠しつつあるなるべし。

(少女③三三二)

「冠者の君」とは夕霧のことであり、すでに元服を済ませたという意味である。彼は、同じ大宮の〈子〉である雲居雁と「ひとつにて生ひ出で」た（一つ屋根の下で、ともに育った）とあり、十歳を過ぎた頃からは「御方異にて」とあるように、部屋を違えたと言われている。雲居雁の父・内大臣からは、「男子にはうちとくまじき」と、ある程度の年齢に達した男女が、ともに

生活すべきではないとされている。従来、夕霧と雲居雁の関係は、小さい頃からともに過ごした「幼馴染み」であり、その幼馴染みが、お互いに恋心を抱き、やがては結婚するとして、『伊勢物語』「二十三段・筒井筒」の話柄が下敷きにされていると言われている。<sup>(注1)</sup>

昔、おなかわたらひしける人の子ども、井のもとにいでて遊びけるを、おとなになりなければ、男も女もはぢかはしてありけれど、男はこの女をこそ得めと思ふ、女はこの男をと思ひつつ、親のあはすれども、聞かでないありける。さて、このとなりの男のもとより、かくなむ、

筒井つの井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに

女、返し、

くらべこしふりわけ髪も肩すぎぬ君ならずしてたれかあぐべき

などいひいひて、つひに本意のごとくあひにけり。

「筒井筒」でのモチーフは「井筒（＝井戸）」である。若い男女が、互いの家から「井のもとにいでて遊びける」（井戸のもとへ出てきて遊んだ）ということであり、その男女が、恋する年頃にまで成長すると、互いを意識し、結婚相手として認識するという展開となる。

夕霧と雲居雁においても、この「幼馴染みの恋」の話柄が下敷きとされており、「まめ人・夕霧」の純愛を示すエピソードとして理解されている。<sup>(注2)</sup>

だが、この二人は「筒井筒」と同じであろうか。「筒井筒」では、互いの家から出てきて、井戸の周りで遊びあった幼少期について語られている。しかし、夕霧と雲居雁の場合は、「ひとつにて生ひ出で」た過去を持ち、十歳を越えた頃には、「御方異にて」（＝部屋を分ける）とあるため、それ以前は、同部屋で生活していたことが知られる。これは、はたして、ただの「幼馴染み」という枠組みで片づけてよい事柄であろうか。たんなる「幼馴染み」であれば、もちろん互いの住む家は別である。しかし、夕霧と雲居雁の場合は、大宮という〈母〉のもとで、同部屋で育つ〈子〉どもたちである。これは、「幼馴染み」というよりはむしろ、二人の〈姉弟〉という近親的關係として捉えられる事象なのではなからうか。

それまでは「男女」として意識されていなかったとしても、これからはそれを意識せざるを得ないために、父大臣からは、「男子にはうちとくまじき」ということで、部屋を分けられることになる。このことにより、二人の間には、一層の恋心が渦巻くこ

となり、「おほけなくいかなる御仲らひにかありけん」(畏れ多いことに、いったいどのようなお二人のご関係であったのだろうか)と、二人の「男女の關係」が意味深に語られることになる。

夕霧と雲居雁は、「いとこ」の關係である。藤井貞和氏がまとめるところの「交又いとこ」にあたり、結婚關係においてタブーはないとされる。<sup>(注3)</sup>「交又いとこ」とは、親の性別が異なるところのいとこの關係のことである。葵の上(女性)と内大臣(男性)のきょうだいの、それぞれの子である夕霧と雲居雁は、「交又いとこ」ということになる。光源氏と葵の上の結婚も「交又いとこ」のものである。光源氏の父帝の、妹である大宮の、娘が葵の上である。この關係においてタブーが伴わないのは、おそらくはこの当時、親の性別が違えば、その子供たちは育つ場所が自ずと異なるため、親戚のなかの近しい(他人)のごとく成長するためであろう。

もともと「交又いとこ」である夕霧と雲居雁が、通常のように別邸で成長し、大人になって異性として意識し、恋をし、結婚にいたるならば、そこに「禁忌」の匂いはあまり漂わないが、実際は、大宮のもとで、同部屋で成長している。実際の血のつながりはないものの、幼いときから一緒に育つことからは、象徴的な(姉)と(弟)という關係性が感じられても不思議はない。父大臣が、「男子にはうちとくまじき」という方針で、遅ればせながら娘の養育に口を出し、互いを引き離そうとしたところで、それまでの生活を知っている乳母たちからすれば、「にはかにも、いかがはもて離れはしたなめきこえん」(突然、どうして二人を赤の他人のように引き離してみることができようか)とある。急に「男女關係」として対処することが難しいほど、それまでの二人は、男も女もない、(姉弟)という近しい(家族)として育ってきたことが知られる。周りの大人からすれば、幼い(姉弟)でしかなかった子どもが、いつのまにやら「男女關係」となったわけであるから、その事態は、「おほけなくいかなる御仲らひにかありけん」と語り手が擲揄するように、想定外の事態であったことになる。

先行論文でもまとめたように、夕霧と雲居雁の恋は、たんなる可愛らしい幼馴染みの恋にとどまらず、大宮という(母)のもとで成長した(姉弟)という近親的關係における恋、つまり、近親相姦の恋の凶に準じるものとして見ることができる。もちろん、二人は本当の姉弟ではないし、交又いとこであるため、恋をしても禁忌ではない。しかし、実態として、同部屋で幼い日々を過ごすということが、象徴としての(姉弟)の關係を彷彿とさせ、周囲の大人の予想に反して、いつのまにやら男女關係になってしまったところに、禁忌の匂いを漂わせるのである。かく幼少期の夕霧には、無自覚に近親相姦的欲望が立ち現れていると言える。

## 二、「豊饒の海」松枝清頭と綾倉聡子

先行論文で、夕霧と雲居雁の二人の恋を考察するに際して、比較対象として提示したのが、三島由紀夫『豊饒の海』である。松枝清頭は幼い頃に、「優雅」を学ぶために、堂上華族である綾倉家に居候する。綾倉家の一人娘である聡子は、清頭よりも二歳年上の女性であり、奇しくも、夕霧と雲居雁の年齢差と同一である。<sup>(注5)</sup>

松枝侯爵は、自分の家系に欠けてゐる雅びにあこがれ、せめて次代に、大貴族らしい優雅を与へようとして、父の賛同を得て、幼ないころの清頭を綾倉家へ預けたのであつた。ここで清頭は堂上家の家風に染まり、二つ年上の聡子に可愛がられ、学校へ上るまでは、清頭の唯一の姉弟、唯一の友は聡子になつた。(二)

『源氏物語』の夕霧と雲居雁のごとく、清頭と聡子は同じ屋根の下で暮らしていた。『伊勢物語』『筒井筒』の恋を彷彿とさせつつも、同じ屋敷で育つ点においては、『伊勢物語』ではなく、『源氏物語』の夕霧と雲居雁の例に等しい。ただのいとはなく、ただの幼馴染みではなく、同じ屋敷で成長する二人は、「唯一の姉弟」と称される。

やがて清頭は、治典王殿下との結婚の勅許がおりた聡子に対して、「至高の禁を犯す優雅」という看板のもとに恋をすることになるが、これについて柴田勝二氏は、清頭にとつてのタブーは「勅許」ではなく、真のタブーは「姉弟関係」と「優雅の劣等感」にあると述べる。<sup>(注6)</sup>

けれども果たして勅許を契機として聡子はタブーの、つまり不可触の禁忌となつたのだろうか？ それはむしろ逆である。勅許によって聡子の存在が清頭にとつてタブーの対象でなくなつたからこそ、清頭は彼女に向けて自己の情念を放出することが可能になつたのだ。――略――勅許がタブーとして出現する以前に、すでに彼女が清頭のなかで魅惑と恐れを同時に感じ取らせるタブー的な存在として位置づけられていたことを物語っている。その恐れは彼女が引き連れた優雅がもたらすものであり、それが自己の近辺にありながら実は究極的な他者であることを清頭が認識しているということにはほかならない。

清頭がもともと聡子への恋心を抱いていたであろうことは、読者はわかっている。ただし、本人はそれを認めない。聡子に対する次のステージへ進むためには、「決定的な何か」を清頭は欲する。それが、治典王殿下と聡子の結婚の勅許であつた。これぞ「至

高の禁」であるとして、胸を高鳴らせて、恋心を認めるにいたる。

古典の世界でいえば、『伊勢物語』の「昔男」（非在原業平）と二条后の恋であろう。「昔男」は、清和天皇の后になるはずの藤原氏の娘に恋をした。本来であれば、あらかじめ諦めて手を出さない恋のはずである。しかし、「昔男」は諦めず、気高いその女性を盗み出してしまふ。『伊勢物語』「六段・芥川」は、教科書にもとられる有名な場面であるが、ここで、男は、「女のえ得まじき」（手に入れられそうもない女性）を誘拐する。「昔男」は、藤原氏にとつての大事な娘を誘拐するという危ない橋を渡る。結局、女は兄弟に奪い返されて、男のものにはならない。奪い返されたあと、つまり、誘拐がばれたあと、「九段・東下り」で、男は、親しい友を数名連れて都を離れる旅をすることになる。

この古典世界の影響のごとく、清頭は、将来の後である聡子への恋心こそを認める。しかし、柴田氏は、「勅許」が本当の「禁忌」ではないと言う。むしろ、勅許を得るといふ〈禁忌〉をいただくことで、それ以前の「優雅の〈姉〉」であつたという、本来の「禁忌」としての存在性が和らいだために、清頭は聡子と男女の関係になれると述べる。

勅許に対して「至高の禁」と称する清頭と、東宮妃候補でもある雲居雁と夕霧が男女の関係になつてしまうことを語り手が「おほけなし」と表現することについては、先行論文でまとめていたのでここでは繰り返さない。本稿では、清頭が聡子に〈姉弟〉であるという真のタブーを感じていたと考えられる点について、夕霧と雲居雁においても同様の見方ができることを強調しておきたい。

### 三、夕霧と玉鬘

さて、その夕霧が、雲居雁のほかにも同様に〈姉〉へ恋する場面がある。相手は「玉鬘」である。

玉鬘は、若き日の内大臣（頭中将）と夕顔との娘である。ある日、光源氏が夕顔と夜を過ごしているとき、六条御息所と思われる生霊に取り殺されたかのようにして夕顔は亡くなる。その後、娘・玉鬘は、乳母一家に連れられて筑紫で成長をする。二十歳を迎え、再び都へ戻ってきた際に、かつての夕顔の侍女で、今は光源氏の屋敷に住まう右近と再会を果たす。右近は、夕顔の死後、いなくなった玉鬘の行方を探し求めていたのであり、この日も、祈願のために長谷寺に参詣していたところであつた。

玉鬘発見の報告を受け、光源氏は自邸・六条院に玉鬘を迎える。玉鬘は父親・内大臣に逢いたいと思っていたが、光源氏は、それはいざれ果たす約束として、まずは自分の娘として、玉鬘を六条院に住まわせるのであつた。光源氏の娘という評判から、世の貴族たちはこぞつて玉鬘に求婚する。その中の一人が、内大臣の息・柏木である。柏木にとって、玉鬘は異母姉にあたるが、



もちろんなことを知るよしもない柏木は、一人の女性として恋文を届ける。一方、夕霧は、自分の異母姉と知っているからこそ、玉鬘に求婚はしない。この三角関係が崩れ出すのが、「藤袴」巻である。

柏木は、玉鬘が本当は姉であることを知り、求婚者の立場から外れる。一方、夕霧は、本当は姉でなかったことを知り、玉鬘に対して恋心を示し始めるのである。このことについて、臼田甚五郎氏は、夕霧にとっては「姉から女へ」、柏木にとっては「女から姉へ」という、両者が「シーソー」関係になっていると述べる。<sup>(注)</sup>

玉鬘をはさんでの夕霧と柏木との関係は、まるでシーソーのようである。柏木の熱が上っていた時には、夕霧が下っている。夕霧が上り出すと、柏木が下り出すという次第。

一人の女性・玉鬘をとおして、二人の男性——夕霧と柏木が、かく変貌する展開は大変興味深いものであるのだが、姉ではないと知ったあとの夕霧の恋心の示し方に注意される。

はじめより、ものまめやかに心寄せきこえたまへば、もて離れてうとうとしきさまには、もてなしたまはざりしならひに、今、あらざりけりとて、こよなく変らむもうたてあれば、なほ御簾に几帳添へたる御対面は、人づてならでありけり。殿の御消息にて、内裏より仰せ言あるさま、やがてこの君のうけたまへるなりけり。…略… かかるついでにとや思ひよりけりけむ、蘭の花のいとおもしろきを持たまへりけるを、御簾のつまよりさし入れて、「これも御覧すべきゆゑはありけり」ととみにもゆるさで持たまへれば、うつたへに思ひもよらで取りたまふ御袖を引き動かしたり。

おなじ野の露にやつるる藤袴あはれはかけよかごとばかりも

(藤袴③三三三)

「藤袴」巻は、夕霧の育ての〈母〉である大宮が亡くなった事実から始まる。〈子〉としての夕霧は喪服を着るが、同じく、大宮の孫になる玉鬘も喪服を着ている。夕霧が「蘭の花」を持って玉鬘を訪ねるが、この「蘭の花」の別称(歌語)を「藤袴」と言い、「藤袴」は喪服のことでもある。

多くの求婚者を集めた玉鬘であったが、結局は、冷泉帝の尚侍になるという結末を迎えようとする。光源氏の命を受けて、夕霧が、尚侍任命の件を伝えるに玉鬘を訪問したのが右の場面である。これまでずっと「姉」と思って親身に接してきた夕霧に対して、本当は違ったということがわかった今でも、「今、あらざりけりとて、こよなく変らむもうたて」(今さら違ったからといっ

て態度をあらさまに変えるものよくない」ということで、玉鬘は仲介役をもうけず、直接簾越しに対面をする。そこで夕霧は、「蘭の花」を簾の下から差し入れて、玉鬘に歌を詠むのであるが、その歌には、玉鬘を「おなじ野の露」（同じく大宮を祖母として持つよしみ）と表し、そんな自分へ「あはれはかけよ」（思いを寄せてほしい）という恋心を伝えるのである。

この「おなじ野の露」という言葉は、早くに注釈が指摘しているように、『うつほ物語』の次の和歌を踏まえている。

「…略…心憂く、など、この君にしも、かくおぼされけむ」など思して、かく聞こえ給ふ。

「同じ野の露はいづれもとまらねとまづ消ゆとのみ聞くが苦しき」

かく承るも、いとほしうなむ」と聞こえ給ふ。侍従、見給ひて、文を小さく押しわぐみて、湯して飲み入れて、紅の涙を流して、絶え入り給ひぬ。殿の内揺すり満ちて、惑ひ焦がれ給ふこと限りなし。あて宮、聞こし召して、「いみじく悲し」と思す。

（菊の宴・三六七）

源正頼の九女・あて宮をめぐり、多くの求婚者が集まるが、その中には、同母兄である仲澄の存在もあった。当然、あて宮は、兄・仲澄の恋心を受け入れることはしないが、次第に、命の灯が消えゆかんとする仲澄に同情の気持ちを送る。ここで詠まれる「同じ野の露」とは、二人が同じ屋敷でともに育った兄妹関係であることを意味し、兄妹間での恋心を示す歌言葉として象徴的な語になっている。先の夕霧の歌でもこの言葉を用いることによって、夕霧は、互いに大宮を祖母にもつ自分たちが「姉弟関係」であり、その〈姉〉に対する恋心を詠んでいることを暗に示している。夕霧にとって玉鬘が〈姉〉であることで、より一層恋心を増幅させる仕組みについては、佐藤瞳氏の論に詳しい。<sup>(注9)</sup>

夕霧は姉でない玉鬘を〈姉〉と仮構することで、自らの恋に禁忌性を付与し、〈禁忌の恋〉のなかではじめて恋心を発露させていく。「行幸」巻をはじめ「野分」巻以降において夕霧は、「野分」巻の時以上に、より玉鬘を〈姉〉として位置づけているのである。…略…「野分」巻で垣間見た光源氏世界への侵犯性は、一過性のもので終わらせられることはなく、玉鬘や夕霧によって仮構された〈禁忌〉性が描かれることによって、「野分」巻の問題は提起されつづけていくのである。

「姉ではない玉鬘を〈姉〉と仮構することで、自らの恋に禁忌性を付与」という、夕霧の近親相姦的特性を佐藤氏は述べるが、その転機となるのが「野分」巻であると言う。「野分」巻は、台風吹き荒れたあとの六条院を見舞いに訪れた夕霧が、紫

の上・明石の姫君・玉鬘などの、光源氏の秘められた屋敷の内側に気づいていく重要な巻である。<sup>(注10)</sup>

いであなうたて、いかなることにかあらむ、思ひよらぬ隈なくおはしける御心にて、もとより見馴れ生ほしたてたまはぬは、かかる御思ひ添ひたまへるなめり、むべなりけりや、あな疎ましと思ふ心も恥づかし。  
(野分③二七九)

父娘だと思っている光源氏と玉鬘が、親しげに寄り添っている現場を見てしまった夕霧は、「あなうたて」(ああ嫌だ)と嫌悪感をあらわにする。しかしその後、色好みである光源氏が、娘とはいえど、小さい時から一緒に生活しているわけではない間柄では、このような感情を抱いてしまうのも「むべなりけり」(頭では理解ができる)、<sup>(注11)</sup>と思うのである。そして、実際の近親関係における恋に嫌悪を示す夕霧が、実際は近親関係ではないとわかったあとに、わざわざ(姉)を仮構して、玉鬘に近親的な恋心を示そうとしたのが、先の「藤袴」巻になる。雲居雁についても然りであり、夕霧は、実際の近親関係ではないが、近親関係に準じた<sup>(注12)</sup>関係において、恋心を発露させるのである。

#### 四、夕霧における近親相姦的特徴の流れ

「少女」巻に見た、夕霧における近親的な恋の性質が、「野分」巻を転機に、「藤袴」巻において明るみになっていくことが了解できるのだが、それが父・光源氏から享受されたと思わしき場面について、西耕生氏が指摘しており、興味深い。<sup>(注13)</sup>

御消息、「こなたになむ、いと影涼しき篝火にとどめられてものする」とのたまへれば、うち連れて三人参りたまへり。：略… 御琴ひき出でて、なつかしきほどに弾きたまふ。源中将は、盤渉調にいとおもしろく吹きたり。頭中将、心づかひして出だしたてがたうす。「おそし」とあれば、弁少将拍子うち出でて、忍びやかにうたふ声、鈴虫にまがひたり。二返りばかりうたはせたまひて、御琴は中将に譲らせたまひつ。げにかの父大臣の御爪音に、をさをさ劣らず、はなやかにおもしろし。  
(篝火③二五八)

西氏は、物語における姉・妹への恋心を語る話型について、「いもうとむつび」という用語を使い、その神秘性を表現しようとする。『伊勢物語』「四十九段」における妹恋の場面が、後の物語に多く影響を与えていることを踏まえ、「いもうとむつび」と「琴」



のモチーフに着目し、琴を介して玉鬘に接近する光源氏にも「いもうとむつび」の要素があると述べ、さらには『源氏物語』「篝火」巻で、そんな光源氏から夕霧にむけて、和琴が譲られている点に注目する。

伊勢物語四十九段の陰翳は、ただ胡蝶の巻のみにとどまらず、それ以後の巻々にも見出すことができるのであった。かくて、伊勢物語四十九段を換骨奪胎しながら展開される玉鬘をめぐる物語は、篝火の巻の終わりにおいて転機を迎えるように思われる。…略… 彼自身手づから弾いていた和琴を「中将にゆづ」ったという琴の委譲とあいまって、じつに興味深い。

「少女」巻で、雲居雁という〈姉〉への恋が描かれ、「篝火」巻では、「いもうとむつび」のモチーフである「琴」を光源氏から委譲される。その後、「野分」巻で、あやしげな「父・娘」の関係に嫌悪感を抱きながらも、色好みとして「むべなりけりや」と理解する。最終的には「藤袴」巻で「おなじ野の露」であることを主張して、あからさまに〈姉〉としての玉鬘に「あはれ」を求める男となる。このように、夕霧において、実際のそれではなく、象徴としてのそれにおいて、一貫して「いもうとむつび」の恋心を表出する流れが見て取れる。<sup>(注1)</sup>

##### 五、夕霧と柏木の「あはれ」の希求

「藤袴」巻で、夕霧は、〈姉〉としての玉鬘に「あはれ」を求めるのだが、『源氏物語』において、女性に対して「あはれ」を強く求める男といえは、柏木である。

「かう、いとつらき御心にうつし心も失せはべりぬ。すこし思ひのどめよと思されば、あはれとだにのたまはせよ」と、おどしきこゆるを、いとめづらかなりと思して、ものも言はむとしたまへど、わななかれて、いと若々しき御さまなり。

(若菜下④二二八)

柏木は、光源氏の娘と思った玉鬘に求婚するも、それが実の姉であったことを知るや、求婚者の立場から退く。その後、朱雀院の女三宮を求めるも、最終的に彼女は光源氏に降嫁されるのだが、諦めきれない柏木は、乳母子でもある小侍従を使い、光源氏のいない間に、女三宮の寝所へ忍び込む。そこで、柏木は「あはれとだにのたまはせよ」と女三宮に迫る。かなわぬ恋である

としても、せめて一言、自分に対して「あはれと思う」という言葉だけでもください、と切に願う場面である。「あはれ」という言葉は、柏木と女三宮の恋の場面において重要な用語であるのはもちろんだが、これが先の夕霧と玉鬘の場面において、すでに使用されていることに注目したい。夕霧は玉鬘に、「おなじ野の露」として生きる私に、〈姉〉からの「あはれ」を求めている。柏木と「あはれ」という言葉については、早くから『竹取物語』の影響が指摘されているが、永井崇大氏は、「あはれ」の希求について、「身のほど」「位」の論理に負けた夕霧から柏木へ担わされていく、「心」の紐帯を取り戻す行為、と述べる。<sup>(注15)</sup>

夕霧は雲居の雁との幼恋を引き裂かれた来歴をもつ。「男君、我をば位なしとてはしたなむるなりけりと思すに、世の中恨めしければ、あはれもすこしさむる心地してめざまし」——夕霧は、「位」の論理に負けた「あはれ」を「心」の紐帯を繋いで取り戻そうと試みたのだ。物語の継承過程で「位」は「身のほど」へと広がり、柏木はさらなる重荷を負わされることになる。夕霧が仄めかした「今はた同じ」の言葉は、『後撰和歌集』収載の恋歌、「わびぬれば今はた同じ難波なる身をつくしても逢はんとぞ思ふ」の意を響かせた表現であった。その実質が密通による破滅という形で柏木に担わされていくところに、物語の前進が認められるのだ。…略…藤裏葉巻、ここに到り劣位者夕霧の恋は帰結する。幼恋の締めくくりには是非とも用意されなければならなかったのは、「六位宿世」という屈辱的な汚名の返上であった。〈中納言〉になった夕霧は、官位を得てまとった「光」の陰に、藤袴巻でみせた「あはれ」を冀う姿を晦ませた。劣位者の物語は、同じ〈中納言〉でありながら「身のほど」を貶められた柏木へと繋がれていくのだ。

「あはれ」の希求を軸に、夕霧から柏木への継承がある点は面白いが、その具体的な内実は異なっているのではなからうか。たとえば、柏木は、自らを在原業平に託けて、二条后のごとき、手を出してはならない女性Ⅱ女三宮への恋心を示す。この恋を貫かんとすれば、いずれ身を滅ぼすことになるのを覚悟の上で、むしろ東下りをした業平のごとき、女三宮との恋の果てにある身の破滅を欲望し、彼女からの「あはれ」を希求する。この場合、相手は二条后のごとき、手を出してはならない「禁忌の女性」である。一方、夕霧は、実の姉ではない玉鬘であるから、一般的な男女の関係として「あはれ」を求めればよいものを、そうはしていない。また、冷泉帝の尚侍（非帝の私的な后）に任命されるのをきっかけに、手を出してはいけない「后」を手に入れるための「あはれ」でもない。〈姉〉としての玉鬘からの「あはれ」を求めているのである。

永井氏は、先の引用で、雲居雁に対して「夕霧は、「位」の論理に負けた「あはれ」を「心」の紐帯を繋いで取り戻そうと試みた」と述べる。しかし、夕霧の場合、指摘された「六位宿世」という言葉の、その当時に夕霧に与えた屈辱は大きからうとも、

真面目に努力すればいずれ解消されるコンプレックスである。玉鬘に対しては、わざわざ〈姉〉と〈弟〉の関係にことよせて「あはれ」を求める。一方、柏木は、光源氏の妻である女三宮に恋をする。この柏木の立場から成る「身のほど」の意識は、いずれ解消されるべくもない。このまま恋心を貫けば身の破滅にいたるであろう展開において、いつまでも自分に与えられることはい女三宮からの「あはれ」を要求する。近親相姦的禁忌を模した「あはれ」を求める夕霧と、〈帝の后〉を手に入れようとして「あはれ」を求める柏木とは、「禁忌」の内容が異なっており、そこから浮上する「あはれ」の内実も異なる。

#### 七、同じ根から出た植物のあらわれとして

かつての光源氏は、亡き母に似た、父帝の后・藤壺へ恋をし、男女の関係となった。彼の場合の禁忌の内実は、「后」（王権的禁忌）であり、「母」（近親的禁忌）である。光源氏の子ども世代となった夕霧・柏木の時代において、后を求める王権的禁忌は柏木に、近親的禁忌は夕霧にとりように、その禁忌は二分して受け継がれている。

どのような禁忌に身を置き、どのような相手からの、「あはれ」を求めたいのかについて、夕霧と柏木は異なっている。しかし、ある「禁忌」の中に身を置き、禁忌の対象からの「あはれ」を希求すること自体は共通する。要は、「根」が一つということである。その根から、それぞれが「花」になるのか「葉」になるのかという、現れ方の違いがあるだけであり、その現象が連動して語られることから、二人は同じタイプの対応関係にあるという状況が見えてくる。夕霧と柏木の鏡像的關係性が見えてくる。

本稿の副題に用いた言葉は、『豊饒の海』「春の雪」から借りている。『豊饒の海』「春の雪」で、行為者・柏木の存在と思われる松枝清頭と、認識者・夕霧的存在と考えられる本多繁邦について、語り手は早い段階で次のように紹介している。

もしかすると清頭と本多は、同じ根から出た植物の、まったく別のあらわれとしての花と葉であつたかもしれない。清頭がその資質を無防備にさらけ出し、傷つきやすい裸かで、まだ自分の行動の動機とはならぬ官能を、春さきの雨を浴びた仔犬のやうに、目にも鼻にも滴をなして宿してゐると反対に、本多は人生の当初はやくもその危険を察して、その明るすぎる雨を避けて、軒下に身をちぢめてゐるはうを選んだのかもしれない。(二)

このように、清頭と本多を二項対立的に論じることが難しくなるのと同様に、夕霧と柏木の存在についても、それぞれ別個のも

のとして捉えることは難しくなつてこよう。<sup>(注16)</sup>二者二様でありながら、実は同根であるという人物設定については、『豊饒の海』における松枝清頭と本多繁邦に受け継がれていると同時に、『金閣寺』の溝口と柏木という人物設定にも表れている。認識者である夕霧から声を奪われて金閣寺を燃やす行為者になる溝口と、行為者である柏木から脚を奪われて認識者になる『金閣寺』の柏木へ——、これらの比較検討は今後の研究課題としたい。

\* 論文中の引用本文は、『伊勢物語』『源氏物語』は、新編日本古典文学全集、『うつほ物語』は、『うつほ物語』全 改訂版、『豊饒の海』は、『決定版 三島由紀夫全集』より、それぞれ引用している。

## 【注】

- 注1 大井田晴彦「夕霧の幼な恋と『伊勢物語』二十三段」(『人物で読む源氏物語 内大臣・柏木・夕霧』勉誠出版、二〇〇六年)、ほか。
- 注2 しかし、夕霧の恋をたんなる「純粹」とは評価しない先行研究がある。森一郎「落葉宮物語—その主題と構造—」(『源氏物語作中人物論』笠間書院、一九七九年)は、夕霧の恋心を「かわいたもの」と称し、藤原克己「幼な恋と字間—少女卷—」(『源氏物語講座3 光る君の物語』勉誠社、一九九二年)は、「かかる恋を純愛と呼べようか」と評している。
- 注3 藤井貞和『物語の結婚』(創樹社、一九八五年)、『タブーと結婚』(笠間書院、二〇〇七年)
- 注4 拙稿『源氏物語』「至高の禁」の系譜(『円環の文学—古典×三島由紀夫を「読む」』新典社、二〇一三年)
- 注5 安達敬子「春の雪」覚書—三島由紀夫と『源氏物語』(『和漢語文研究』十一、二〇一三年一月)
- 注6 柴田勝二「優雅の行方—三島由紀夫「春の雪」論—」(『日本文学』四七一九、一九九八年九月)
- 注7 (注4)に同じ。
- 注8 臼田甚五郎「夕霧と柏木と玉鬘」(『国文学』四—十一、一九五九年八月)
- 注9 佐藤瞳『源氏物語』「野分」巻の垣間見と「藤袴」巻の恋(『物語研究』十一、二〇一一年三月)
- 注10 三谷邦明「野分巻における〈垣間見〉の方法——(見ること)と物語あるいは(見ること)の可能と不可能——」(『物語文学の方法Ⅱ』有精堂、一九八九年)
- 注11 自分(夕霧)の場合はその逆である。「本当の父娘であっても、小さい頃から一緒に過ごしているでなければ、男女関係になることもおかしくはない」と考えるのであれば、逆に、小さい頃から〈家族〉のように一緒に過ごしている雲居雁とは、本当の姉弟でなくても、〈姉弟〉関係になるような、精神的な縛りが生じてもおかしくないという理屈になる。
- 注12 藤河家利昭「姉と弟の恋—柏木の物語の基底として—」(『広島女学院大学国語国文学誌』二二、一九九二年二月)は、本人の意識がなくとも「姉弟の恋」が描かれていることに意義を見出そうとする。しかし、実際には、柏木は姉と知ったあとに求婚者の立場から身を引いている事実を考えると、姉ではないと知ったあとの夕霧が、それでも〈姉〉として恋心を示そうとすることは大きな相違点である。
- 注13 西耕生「玉鬘十帖と伊勢物語四十九段—「いもうとむつび」の物語史—」(『文学史研究』二九、一九八八年二月)

- 注14 「いもうとむつび」について、助川幸逸郎氏は「妹恋」という用語で呼び、これが第三部世界でも継続される物語的モチーフであると言う。助川幸逸郎「宇治大君と〈女一宮〉——〈妹恋〉の論理を手がかりとして——」（『中古文学』六八、一九九八年五月）
- 注15 永井崇大「柏木・夕霧と「あはれ」希求の物語——第一〜第二部世界への橋渡し（石上中納言物語）との交渉——」（『源氏物語（読み）の交響』新典社、二〇〇八年）
- 注16 佐藤瞳「受動態としての柏木の〈脚〉——『源氏物語』若菜巻の垣間見と密通」（『湘南分学』五四、二〇一九年三月）で、従来指摘されていた柏木の脚の物語に対して、氏は、柏木の脚は恋の場面では機能していないこと、一方、夕霧は歩き回る脚の力を持っていること、を指摘する。脚の特徴一つとっても、柏木と夕霧が安易に二項対立で考えられないことがわかる。